

聴覚障害学における手話の学習

—学習者の個人差への対応—

石原 保志 川口 博 根本 匡文
教育方法開発センター 一般教育等

要 旨：聴覚障害学の授業の中で行われている手話の学習において、学習者の個人差にどのように対応すべきかを検討するため、平成6年度の授業記録を、「学習開始時の学生の手話技能と手話に対する意識」「学習内容、方法と学習状況に関する所見」「学習後の学生の意見」に整理し分析した。この結果、学習内容に関する学生の意見は、手話技能の優劣により対立するのではなく、主に手話技能の優れた者が個々の志向に応じた多岐にわたる内容を要望しているという状況がうかがえた。また学習方法に関しては、今後さらに工夫していく必要があることが示唆された。

キーワード：手話学習 聴覚障害学 個人差 授業 学習内容 学習方法

1 はじめに

筑波技術短期大学聴覚部では、第一学年の必修科目である聴覚障害学において、手話の実技に関する学習を行っている。この学習のねらいは、本学に入学した学生が学内外における手話コミュニケーションを円滑に行うための基礎的な手話の技能を培うことであるが、さらにこの学習を通して、手話に関する理解を深め、また手話に対するモチベーションを高めるという効果も期待される。

一方、本学に入学する学生の生育歴、教育歴は多様であり、手話の技能や手話に対する意識に関して、個人差が非常に大きい。したがって講義において手話を扱う場合は、この個人差を配慮した上で学習内容や学習方法を検討しなくてはならない。

このような背景から、本研究では聴覚障害学における手話実技の学習が「学習者の多様性にどのように対応すべきか」をあらためて検討するため、平成6年度に行われた授業の記録を分析する事にした。

2 方法

平成6年度の聴覚障害学における手話実技の学習に関する記録資料を、「学習開始時の学生の手話技能と手話に対する意識」「学習内容、方法と学習状況に関する所見」「学習後の学生の意見」に整理し、これらを総合的に検証した。分析した資料は以下の通りである。

・手話読み取り検査

手話実技の学習に際して、学生一人ひとりの手話の技能を把握する目的で、平成5年度から実施している検査である。平成6年度は、10月第1週目の講義において実施した。クラス毎に読み取りの条件が同一になるよう、

検査材料にはビデオを使用した。「みんなの手話（全日本ろうあ連盟監修）」「ビデオことばの講座：手話によることばの学習（熊本県ろう者福祉協会制作）」より、数単語の文章表現（有意味文）と1分程度の長文を抜粋し、学生に対して表現された内容の記述を求めた。前者は比較的日本語に対応した手話で表現されており、後者は伝統的な手話で表現されている。

・手話に対する意識調査

個々の学生の手話に関する意識と手話の学習に対する積極性を把握するために、読み取り検査と併せて意識調査を実施した。調査方法は、多肢選択と記述からなる質問紙法によるものであった。

・学習の内容、方法と学習状況に関する所見

各クラスで行われた授業別の学習内容、学習方法と学習状況の所見を教師が記録したものである。年間の授業計画は教師により設定されるが、内容、方法は各クラスの状況（学習者の関心や授業回数等）に応じて、ある程度柔軟に対応した。

・手話の実技学習に関する学生の意見、提案

年度末に学生が記述した、平成6年度の手話実技の学習に関する意見、提案である。自由記述方式で、質問は「聴覚障害学の講義における手話の学習についてあなたの意見、提案を述べなさい」というものであった。

3 結果と考察

3-1 学習開始時の学生の手話技能と手話に対する意識

図1は、実技学習開始時に実施した手話読み取り検査

の結果を、得点帯別の学生人数で示したものである。参考のため、平成7年度入学生の結果も併せて表示した。本検査は読み取り面の技能を評価するものであるが、この結果から表現力を含めたおおよその手話の技能を推測することができる。また標準化された検査ではないため、この得点のみから手話技能の程度を客観的に判断することはできないが、日常のコミュニケーション場面の観察と併せて推察すると、以下のような評価水準を設定することができる。まず「30点以下」の学生は、比較的、意志の疎通がしやすい学内のコミュニケーションに限定しても、手話の読み取りや表出に支障をきたしている可能性が高い。「31点～39点」の得点帯は個人差が大きく、「41点以上」の学生は、学内のみならず学外における多様な相手との手話コミュニケーションにおいても、意志の疎通が行える程度の技能を有していると考えられる。なお30点以下の学生10名と41点以上の学生37名の間には、日常のコミュニケーションにおいても、その手話技能に関してかなりの個人差がある様子が観察される。

一方、学生の手話に対する意識はどうであろうか。図2は、「手話の学習や訓練をしたいと思えますか」という質問に対する回答（多肢選択）を、読み取り検査の結果との関連で示している。約半数の学生は、「非常に思う」「思う」といった手話の学習に積極的な姿勢がみられる。これに対して、「あまり思わない」とした学生は、「手話が好きですか」という質問に対して、2名が「たいへん好き」「好き」と回答し、3名が「あまり好きではない」と回答しており、比較的手話の技能が高く特に

学習しなくともコミュニケーションは十分にできるといった考えを持つ者と、手話そのものへの抵抗感を持つ学生の2通りのタイプに分かれるようである。また「少し思う」とした学生のうち読みとり得点が30点に満たない者4名は、全て「手話があまり好きではない」と回答している。

これらの結果を総合すると、対象となる学生の手話に関する属性は次のように分類される。

- ①学内のコミュニケーション場面においてほぼ不自由なくコミュニケーションできる手話技能を有し、手話学習に対して積極的な意欲を持つ学生…19名
- ②学内のコミュニケーション場面においてほぼ不自由なくコミュニケーションできる手話技能を有するが、手話学習に対して特に積極的ではないか、あるいは消極的な学生…17名
- ③学内のコミュニケーションにおいて手話の技能が不十分であって、手話学習に対して積極的な意欲を持つ学生…6名
- ④学内のコミュニケーションにおいて手話の技能が不十分であるが、手話学習に対して特に積極的ではないか、あるいは消極的な学生…4名

3-2 学習内容、方法と学習状況に関する所見

聴覚障害学における手話の学習は、先ず第二学期の前半に、発音、読話と併せて手話に関する簡単な理論が扱われ（聴覚補償に関しては第一学期に扱われる）、第二学期後半から第三学期にかけて、各講義の前半20分程

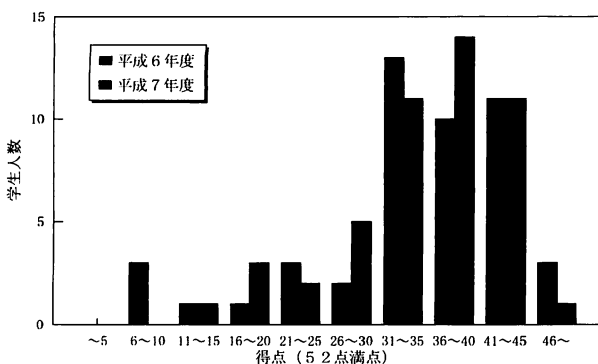


図1 手話読み取り検査の結果

質問：手話の学習をしたいと思えますか

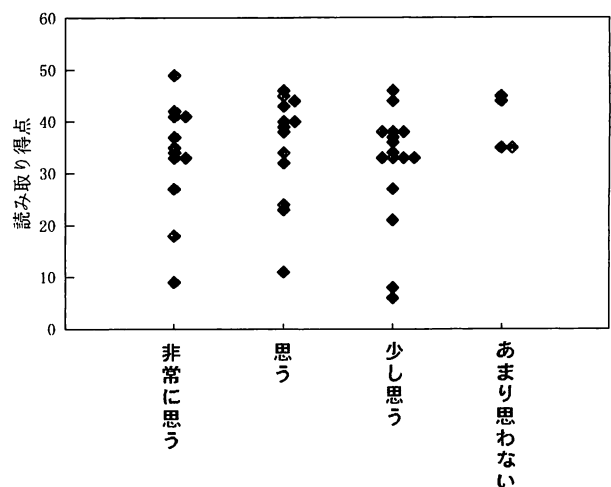


図2 手話学習の希望状況と読み取り検査の得点

度が手話実技の学習に当てられている。各回の授業は、できるだけ学生主導型の展開になるよう心がけた。具体的には、まず教師がOHP、ビデオ、資料などの教材で学習のテーマや内容を示し、具体的な表現や意見を学生に求め、これに対して他の学生が意見を述べ、さらに教師がアドバイスを加えるという手順で学習が進められた。各回の授業における学習内容と学習者の状況に関する所見は、以下の通りである。なお、クラスにより授業回数と内容は若干異なるが、下記事項は全てのクラスで扱われたものである。

・第1回 【手話の読み取り検査及び意識調査】

「京都」「通訳」など、基本的な単語表現が読みとれない学生が少なくない。また10名程度の学生は、伝統的な手話で表現された長文をほとんど読み取れなかった。

・第2回 【手話について考えよう】【挨拶の表現】

手話と身振りの違い（言語としての手話）、手話の種類（伝統的な手話、中間的な手話、同時法的手話）、方言と標準語について、具体的な表現の例をあげて考えさせた。多くの学生は、日常、口話を併用した音声言語に沿った手話表現をしているが、伝統的な手話に関して、同時法的手話とはその表現様式や語順が異なる点について理解できたようである。また、地域による表現の違いや特定の聾学校のみに通じる手話が学生から紹介され、手話の地域性についての認識が深められた様子もうかがえた。挨拶に関する表現では、「おはよう」「こんばんは」などの一般的な表現を知らない学生が各クラスに数名ずついた。

・第3回 【指文字、数詞の表現】

指文字、数詞に関して、相手を読みとりやすいように表現することに主眼をおいた。濁音、半濁音、拗音、促音の表現が曖昧な学生が、各クラスに数名はいるようであった。また数詞については、単位を含めた表現を扱った。

・第4回 【時に関する表現 その1】

秒、分、時、曜日、週、月、年の表現を扱った。「～時」を「ジ」という指文字で表し、「日曜日」を「日」という文字の転用で表すなど、本学に特有の単語表現がみられた。

・第5回 【時に関する表現 その2】

現在、過去、未来の時制を、身体の前後や左右の位置関係で表現する学習である。ほとんどの学生は、「明日」「昨日」といった日常使用する単語ではこの法則に従った表現をしているが、「来月の日曜日」や「一昨年」等は、口話で補いながら曖昧な表現をしている者が少なくなかった。

・第6回 【手話の写像性と具体性】

「山」「使う」「風」「歩く」等を表す際に、対象となる「もの」や「こと」の特徴や意味を捉えて、文脈に即した具体的な表現をする学習である。聾学校出身者の中に非常に上手い表現をする者がおり、手話を楽しみながら表現することを学ぶ一方、これらの表現を分析的に捉えながら学習を進めた。

・第7回 【手話の位置、方向】

手話の位置や方向による能動、受動の関係、場所や立場、時間的關係の表し方の学習である。日常、例えば「助けてもらう」を口話に合わせて「助ける+もらう」というように表現する学生が多いが、この講義で扱った内容に関しては、いくつかの例で、手指の位置、方向による同時的表現の法則が理解できたようであった。

・第8回 【疑問詞】【人物に関する表現】

何、どこ、いつ…等の学習である。日常会話では「何」に口話を併用して疑問詞の全てを表現している者がおり、あらためて個々の疑問詞の表現の違いを学習した。

・第9回 【地名（都道府県と主な都市）】

都道府県名と主要都市名の手話表現を学習し、次に各学生が出身地について自己紹介を行った。

・第10回 【手話の同時性、空間の利用】

表現の位置や方向で、指や空間を利用した同時性の学習である。最も手話らしい表現の学習であり、一部の学生は日常会話においても無意識的にこのような表現をしているが、多くの学生は音声言語と切り離して表現することに馴染めない様子が見られた。

・第11回 【手話の語源】

大原省三著「手話の知恵」と大原氏の講演記録ビデオを教材に、いくつかの手話の語源と大原氏自身の手話表現について学習した。

3-3 学習後の学生の意見

平成6年度の手話実技の学習に関して学生が記述した文章を、KJ法の手続きを参考に、内容の別に分類した。さらに、学生を3-1で分類した手話に関する属性をもとに4つの群に分け、各意見を記述した学生の人数を、この群別に集計した。「上位群」「積極的」は3-1における①に、「上位群」「非積極的」は②に、「下位群」「積極的」は③に、「下位群」「非積極的」は④にそれぞれ対応している。なお3-1で述べたように、上位群・下位群への選別は、学内のコミュニケーションという限定した場面において手話の読み取りと表現がほぼ不自由なくできるか否かを基準としている。以下、各学生の記述内容を「コミュニケーション及び手話利用に関して」「学習内容」「学習方法」「学習効果」「その他」の項目に分類し考察する。

表1 平成6年度に行った手話実技の学習に対する、学生の意見、提案

記述内容	技能上位群		技能下位群		計
	積極的 (19名)	非積極的 (17名)	積極的 (6名)	非積極的 (4名)	
自己のコミュニケーション及び手話利用の状況について					
・ 技能に入るまでは手話をあまり知らなかった。			1		1
・ 専門学校ですつと手話をつかってきた。			1		1
・ 自分は口話が下手だから、いつも手話を使っている。	1				1
・ 高校1年の時から指文字をおぼえ始めた。			1		1
・ 専門学校でおぼえた手話は他の人の手話と違っており、通じなかった。			1		1
・ 自分の両親は手話を全く使わない。			1		1
・ 手話は聴覚者とのコミュニケーションにおいては役立たない。			1	1	2
・ 手話だけを使う人の多くは日本語の文法をよく間違える。		1			1
・ 手話は口話を含めてやった方が理解しやすい。	1	1			2
・ 手話を発音と一緒に使えば、発音はおかしくならない。		1			1
・ 手話はコミュニケーションの手段だから声と一緒に使うべきだ。		1			1
学習効果について					
・ 役だった。勉強になった。	5	2		1	8
・ 手話が好きになった。		1			1
・ 手話は必要ないと思っていたが、手話に関心を持つようになった。		1			1
・ 手話の知識が増した。	1				1
・ おかげでかなりまともな手話を使えるようになった。		1			1
・ 手話を正確に使えるようになった。		1			1
・ 手話に対する考え方がさらに深まった。	1				1
・ 参考になり面白かった。	1				1
・ 楽しめるもので手話に対する新しい見方ができるようになりました。			1		1
・ たった1学期の1講義中20分だけでしたがかなり有意義な授業でした。		1			1
・ 1学期にやった練習会よりもわかりやすく楽しく勉強できた。				1	1
・ 手話の学習をやって、自分の手話の足らなさが目にはっきり見えた。		1			1
・ 日常生活においてためになった。	1				1
・ 手話ができない人のためにもこの手話の学習は良かったと思う。	1				1
・ 自分の手話のレベルが分かって良かった。		2			2
学習内容について					
・ 不満はない。			1		1
・ 具体的に良かった。	2				2
・ 今まで知らない手話表現を知ることができた。	2				2
・ 初心者にとっては分かりやすかったと思う。				1	1
・ 基本的な表現を勉強できたのは良かった。	1				1
・ 基本だけでなく文章などももっとたくさん教えてほしい。	1			1	2
・ 生活に欠かせない手話を厳選して、重点的に学習するのが良い。		1			1
・ 日常使う手話で正しい手話を教えてほしい。		1			1
・ 指文字を読む力を育てたい。			1		1
・ 専門用語の手話などを習いたい。	1				1
・ 新しい手話や社会で用いられる用語の学習も加えてほしい。	1				1
・ 難しい単語の手話を教えてほしいかった。	1				1
・ 職場で使いそうな手話について学習したかった。	1				1
・ 職場で上司と同僚に対する言葉遣いの区別などを教えてほしい。	1				1
・ 地名の手話を覚えることができて良かった。	2	1			3
・ 手話の語源がたいへん参考になった。	1				1
・ 語源をもっとやってほしいかった。	3	1	2		6
・ 全国共通の手話表現を勉強できて良かった。	2	3			5
・ 各地による手話表現の違いを見ることができとても参考になった。	1				1
・ 標準手話もいけれど地方手話をもっとやれば楽しかったと思う。	1				1
・ 表現の位置や表情などの大切さが分かりました。	1				1
・ 手話と同時に体の動きや顔の表情が大切なのは分かるが難しい。	1	2			3
・ 一つの言葉でもいろいろな表現の仕方があることを教えられた。	1	1			2
・ 一つの手話にもいろいろな意味があることを教えてほしい。	1				1
・ 伝統的手話をもっと教えてほしい。	2	1			3
・ 尊厳的な手話をもっと勉強したかった。	2	1			2
・ 手話の目的について時々教えてほしい。	1				1
・ 手話そのものの考え方についてももう少し学習したかった。	1				1
学習方法について					
・ 学生が前に出て表現するという方法は良かったと思う。				1	1
・ 常時、手話の学習会を設けてほしい。		1			1
・ 会話形式の学習を増やしてほしい。	2	1	1		4
・ 実際の聴者の会話から手話を学んだ方がよい。	1				1
・ 時間が短すぎる。もっと時間がほしい。	3	2	2		7
・ 3学期だけでは短い。	2	1			3
・ 1年生だけでなく3年生まであったら良かった。			1		1
・ 1学期にやった方がよい。	1				1
・ もっとビデオを活用してほしい。	1	1			2
・ 手話を知っている人とそうでない人を分けて教える必要がある。		1			1
・ 少しまじめほしい。	1				1
その他					
・ 今後も手話の学習を続けたい。	1				1
・ 後輩達にも手話を教えほしい。	1	1			2
・ まだ手話分からない人のために来年も手話は続けて下さい。	1				1
・ 手話を講義で教えるのはとてもいいことだと思います。		1			1
・ 手話だけでなく、キュー、口話、筆談などの全てを知りたい。			1		1
・ 口話、読唇の学習もやった方がよい。	1				1

3-3-1 自己のコミュニケーションの状況及び手話利用に関して

自己のコミュニケーションの特性や手話に対する考え方に関する記述をまとめたのが、この項目である。手話と口話、音声との併用に関する意見が目立ち、これを併用していきたいという意見が技能上位群の4名にみられる。また、技能下位群の2名が、手話は健聴者とのコミュニケーションには役立たないという意見を記述していた。

3-3-2 学習効果について

この項目は、学習効果に関する記述の中、学習内容、学習方法に直接関わりのない意見をまとめたものである。技能上位群の意見が多い中で、当初手話学習に対して消極的だった学生からの「手話が好きになった」「関心を持つようになった」「新しい見方ができるようになった」という感想は、この学習の最大の効果と言えよう。

3-3-3 学習内容について

ほぼ全ての学習内容に関して肯定的な意見が述べられており、この年度に扱った内容に関して、一定の評価が与えられていることがわかる。しかし一方で、多岐にわたる要望、提案が記述されている。

「全国共通の手話表現を勉強できてよかった」は、技能上位群の5名が述べているが、これは自己のコミュニケーション及び手話利用の項目の「聾学校でおぼえた手話は通じなかった」という意見と関連がある。「地名の手話」は、手話技能に関わりなく、参考になったようである。また「手話語源」に関しては、6名が「もっとやってほしい」としており、特に関心が高かったことがわかる。手話表現の空間上の位置やこれに併せた表情の重要性は多くの学生に認識されているようであるが、「表情が難しい」といった、授業の中で皆の前で表現することに抵抗感を持つ学生もみられる。全体的な内容に関しては「基礎的で日常的な手話」の学習を支持する者と、「専門用語」「職場での手話」などの学習を望む者がいるようである。ただし後者の多くは「基礎的な学習に加えて」という記述のしかたをしている。

技能上位群の中、4名が「伝統的手話」「聾者的な手話」を望む意見を記述している。ただし、この中の2名は第6回、第7回、第10回の授業が伝統的手話の表現に結びついたものであることを理解していないようである。この伝統的手話に関する意見は、ある意味では3-3-1の項における「手話は口話を含めて…」「手話を発音と一緒に…」等の意見と対立するものであり、同時法的手話と伝統的手話の両方に関する、要望が出されているとも捉えることができる。しかし、手話の技能が未熟な者にとっては、同時法的手話であろうと伝統的手話であろうと、基本的手話の単語表現を知らずしては表

現も読み取りも十分に行うことはできない。そしてこのような学習者を対象とした基本的な手話語彙の拡充を目的とした学習においては、日本語と対応した学習が効率的であり、また利用せざる得ないという状況にある。一方で、文レベルの学習においては、日本語を材料とした学習では日本語に拘るあまり手話らしい表現への発想を押しとどめてしまうという状況を生み出すこともある。これは、手話本来の表現の豊かさを制約し手話に対するモチベーションの高まりを抑えることにもなるだろう。このように、手話学習の授業における日本語と手話の関係は「学習法」という観点から捉えていく必要がある。

3-3-4 学習方法について

手話技能に関わりなく、およそ2割の学生が学習時間や学習期間の不足を述べており、これらの学生にとって手話実技の学習が特に関心の高いものであった様子がうかがえる。しかし、聴覚障害学の講義では手話の他にも心理、法律、福祉、職業等、扱うべき内容が数多く盛り込まれており、現在の授業コマ数では、手話学習の時間のみを増やすことは困難であろう。これらの要望に対しては、例えば現在手話研修ワーキンググループが行っている手話学習会を充実させていく等により対応していく必要がある。ただ、上記の希望を述べている学生も、講義時間の学習に限定した捉え方をしている可能性が高いことに留意する必要がある。なぜならば、これまでに実施した任意参加の手話学習会には、学生があまり集まらなかったことが多く、講義以外の自由な時間を割いてまで手話の学習をしようとする学生がどの程度いるのか疑問だからである。

また主に技能上位群の学生から、会話形式の学習や実際の会話から学びたいという意見が出されている。会話形式の学習には、例文に沿った会話と、自由な談話場面の2通りの方法が考えられるが、後者については学習内容に応じて積極的に取り入れていく必要がある。

3-3-5 その他

講義における手話の学習に肯定的な意見が述べられている一方で、口話や筆談など手話以外のコミュニケーション方法に関する学習を望む記述が見られる。これらの要望に対しては、教育方法開発センターが行っているコミュニケーション指導の中で対応していく必要がある。

4 総合考察

学生の学習内容・方法に関する意見は、手話の技能の優劣により対立するというよりは、主に手話技能の優れた者が、個々の志向に応じた多岐にわたる内容を要望しているという状況がうかがえた。これらの要望や提案に対しては、今後の授業においてできるだけ対応していく

必要があろう。しかし一方で、限られた授業時間の中では全ての要望を取り入れることは困難であるという状況もある。この制約された時間の中で、もし何れかの内容を優先しなければならないとすれば、比較的手話技能の低い者をターゲットとした基礎的な内容を外す訳にはいかないだろう。ただし学習方法上の工夫で、個々の学生の特性に応じた様々な手話表現を取り上げていくことはある程度可能である。例えば、教師主導になりがちだった具体的な語彙や表現の学習においても、学生の提案にあったように、学生どうしの比較的自由な対話の中から素材を拾い出すように授業を展開させれば、手話技能の高い者、低い者のいずれに対しても、有益な内容を盛り込むことができるかもしれない。またビデオにより多様な人物の特徴ある手話表現を比較する学習も、多くの学生にとって興味深いものになるだろう。いずれにせよ、学習方法に関しては今後いっそう工夫していく必要がある。

5 今後の課題

学習者の手話技能を把握することは、学習内容や学習方法を検討する上で重要である。しかし手話の技能を評

価するための検査は我が国では標準化されたものがなく、障害学の授業では手話を読み取り日本語に置き換えるという検査により、学習開始時の学生の手話技能を評価してきた。この方法は多人数の学生の検査を同時に行えるという長所があるが、学習者の日本語の表現力、すなわち言語力が得点に影響を及ぼすことを避けられない。純粋に手話の技能を評価しようとするならば、読みとれた内容に対する応答、あるいは解答も手話で表現させ、これを評価するという方法が望ましい。しかしこの方法を採用した場合、検査は個別に行う必要があり、学生全員を対象とした場合に時間を要する。また評価の方法も、検査者の主観に頼らねばならない部分があり、その客観性に疑問が残る。制約された時間の中で実施でき、かつ客観性を持った結果が得られる検査法を開発する必要がある。

文献

- ・石原保志：聴覚部学生の手話に対する意識と技能. 教育方法開発センター年報, 1, 54-56, 1994.
- ・石原保志：平成6年度の個別指導の状況. 教育方法開発センター年報, 3, 21-24, 1995.